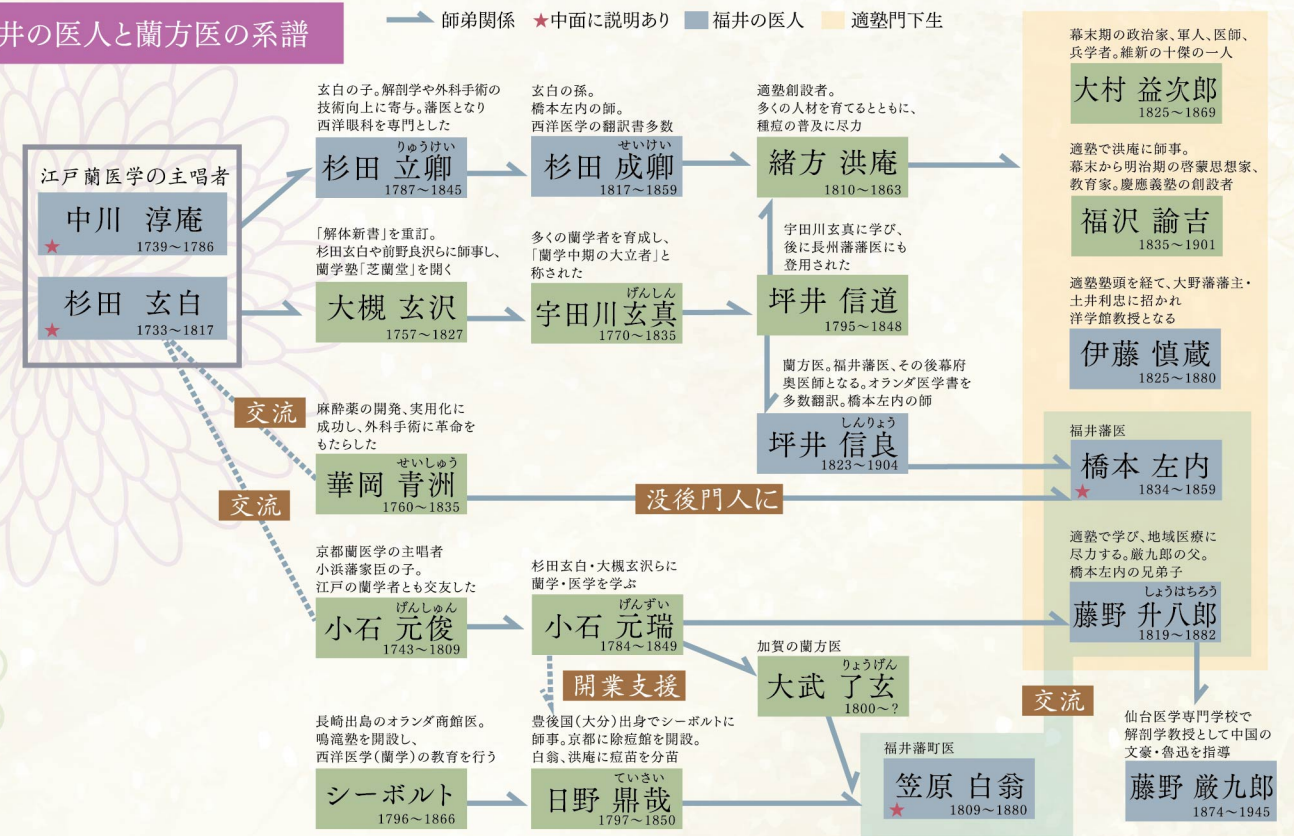




ふくいで花ひらく 蘭学

杉田玄白の解体新書が種となり、笠原白翁の種痘や福井藩の近代化へとつながった――

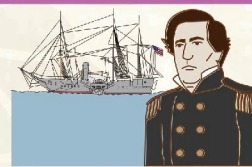
福井の医人と蘭方医の系譜



年表

1774（安永 3）年	杉田玄白、中川淳庵ほか、解体新書 刊行
1789（寛政元）年	大槻玄沢 芝蘭堂を開く
1796（寛政 8）年	ジェンナー（英国）牛痘法を確立
1804（文化元）年	華岡青洲 全身麻酔下で乳癌の摘出術に成功
1815（文化12）年	杉田玄白 蘭学事始を執筆
1824（文政 7）年	シーボルト 鳴滝塾を開く
1838（天保 9）年	緒方洪庵 適塾を開く
1842（天保13）年	小山肆成 引痘新法全書発刊
1849（嘉永 2）年	長崎に痘苗が伝わる 11月に痘苗が福井に届く 日野鼎哉 京都除痘館開設 緒方洪庵 大坂除痘館開設 笠原白翁 福井に仮除痘館を開設 橋本左内 適塾に入門
1851（嘉永 4）年	福井藩・除痘館開設
1854（安政元）年	橋本左内 笠原白翁とともに乳癌患者に手術を実施
1858（安政 5）年	坪井信良ほか、江戸お玉ヶ池種痘所開設
1859（安政 6）年	安政の大獄で橋本左内刑死

蘭学の発展と洋学への移行



18世紀初期の蘭学は、主に天文学や医療の実用知識を国内で活用するためのもので、医師や通詞など限られた人々が従事していた。しかし、19世紀に入り外国船の往来が増えると、国際情勢や軍事技術の習得へと目的が広がり、武士たちも積極的に蘭学を学ぶようになった。

1853年のペリー来航を機に、西洋の学問はオランダ語に限らず、英・仏・独などの言語から直接学べるようになった。蘭学塾出身者は明治政府や教育界で活躍し、新しい学問や技術の発展に貢献した。

明治維新を経て、蘭学は英語や仏語を含む「洋学」へと移行し、その時代を終えた。しかし、鎖国下で唯一西洋知識を伝えた蘭学は、日本の近代化の礎を築いたといえる。

適塾の精神が福井に ～3人の藤野先生～



緒方洪庵が大阪で開いた蘭学塾「適塾」には全国から若者が集まった。幕末から明治維新にかけて近代日本の担い手となった福沢諭吉、橋本左内、大村益次郎ら有名人だけでなく、地域のために尽力する者も多かった。

あわら市下番の村医、藤野升八郎もその一人。適塾で学び、帰郷後も洪庵と手紙のやり取りを続けた。真摯に地域医療に取り組む弟子・升八郎のサポートをした洪庵は、手紙の末尾にたびたび「為道為人（道のため、人のため）」と添えた。洪庵の倫理観が伝わる言葉だ。

升八郎の息子・藤野厳九郎もまた医学の道へ進み教育者となり、中国の文豪・魯迅を指導した。親切で真面目な厳九郎を魯迅は忘れず、生涯の師と仰ぎ続けた。その思いは、魯迅の自伝的回想記「藤野先生」に結実する。厳九郎はのちに帰郷し、升八郎と同じ地域医療に実直に取り組んだ。

升八郎の孫で厳九郎の甥にあたる藤野恒三郎は、細菌学者として食中毒の原因菌・腸炎ビブリオを発見し、公衆衛生教育にも尽力。叔父の厳九郎同様教育熱心であり、教え子の尊敬を集めた。洪庵や適塾の顕彰活動にも取り組み、その精神を現代人に伝えようとした。

洪庵が升八郎に贈った「臨事無為賤丈夫」は、何事にも卑しい人間であってはならないという戒めの言葉だ。時代は違えど、3人の藤野先生は適塾の精神を宿し、医学のため、人のために地域医療や教育に生涯を捧げた。

解体新書を著した杉田玄白、適塾に学んだ橋本左内、種痘に取り組んだ笠原白翁など福井は「蘭学」にゆかりの深い土地です。
蘭学・蘭医学についてより詳しくお知りになりたい方は、「蘭医学サロン」のHPをご覧ください。

HPはこちら▶



【発行】福井県交流文化部誘客推進課

【協力】大阪大学適塾記念センター、福井大学医学部地域医療推進講座、福井県立歴史博物館、福井市立郷土歴史博物館、小浜市、福井県歴史活用コーディネーター 後藤ひろみ
令和7年4月発行

時代は江戸後期。蘭学の種が花ひらく

誰もが教科書で見た「解体新書」を種とするならば、咲いた花が福井藩に、日本にもたらしたものは何なのか。

奥深い蘭学の世界へようこそ――

予防医学の
先駆け
種痘がすごい
理由は？

古来より、天然痘は死に至る病として恐れられていたが、1796(寛政8)年にイギリスの医師ジェンナーが天然痘の予防として種痘法を発明した。ヨーロッパから日本にもたらされ種痘に成功したのは1849(嘉永2)年のこと。福井の町医笠原白翁は命がけて福井藩に痘苗(ワクチン)を運び、庶民に広める努力をした。また、白翁により大阪の緒方洪庵へも分苗された。

福井藩から富山・金沢・敦賀・鯖江・大野などにも痘苗は伝えられ、北陸地域の天然痘予防に大きな役割を果たした。福井藩主・松平春嶽は「西洋医学の越前に弘まりしは笠原良策を以て魁とす」とその功績を讃えている。白翁たちの活動により、「病気を未然に防ぐ」という予防医学の概念が広まり、明治時代には国家主導の予防接種制度へと発展。日本の公衆衛生の向上に大きく貢献した。

2025年には映画「雪の花 ―ともに在りて―」(吉村昭原作)が公開され、命を賭して天然痘に立ち向かった白翁たちの物語が脚光を浴びた。



蘭学トリビア
外科手術も習得!?

種痘だけでなく外科手術も行った笠原白翁。麻酔薬の開発・実用化で知られる華岡流外科の技術を学んだ橋本左内のサポートとして、1854(安政元)年、ともに乳がんの手術をしたという記録も残る。江戸に向かった左内に代わり、術後の病人の管理は白翁が担当した。

種痘を広めた町医者

笠原 白翁
(良策)

(かさはら はくおう)
1809(文化6)～1880(明治13)



福井城下に町医の子として生まれ漢方医学を学ぶが、加賀の大武了玄と出会い西洋医学を知る。京都の蘭方医・日野鼎哉に入門し天然痘を予防する「種痘法」を学ぶ。私財を投げうって種痘の苗である痘苗を福井に運んだ。のちに除痘館を開設し種痘の公営事業化に尽力した。

教育改革/思想家

橋本 左内
(はしもと さない)

1834(天保5)～1859(安政6)



江戸時代末期の日本の思想家・医師。福井藩の医学の学校済世館に入り、漢方医学を学ぶ。のちに適塾で緒方洪庵に師事し、蘭学を学ぶ。藩校明道館の改革にあたり、西洋の知識や科学技術を積極的に取り入れる。安政の大獄で刑死。

幕末の名君/
16代福井藩主

松平 春嶽

(まつだいら しゅんがく)

1828(文政11)～1890(明治23)



笠原白翁の陳情により、幕府に種痘の輸入許可を働きかけ認可を得る。中根雪江、横井小楠、橋本左内ら優れた人材を登用し、藩政改革を推進。藩士育成のため、藩校「明道館」を創設し洋学教育を奨励するなど、教育の刷新を図った。



ふくいに広まった
「ワクチン接種」
種痘



受け継がれる
和魂洋才の
精神

蘭学トリビア
藩の発展は洋式船とともに

福井藩は「黒竜丸」という木製蒸気船を保有し、福井藩の軍事・外交活動や幕府への協力のために活用した。また、大野藩も藩の洋学館教授として招いた伊藤慎蔵の指導のもと蘭学が盛んになり、樺太開拓や交易のため「大野丸」という洋式船を建造。藩は独自の海軍力強化を図った。



福井藩の
近代化



「解体新書」は、1774(安永3)年に杉田玄白・前野良沢・中川淳庵らが翻訳した日本初の西洋解剖学書であり、日本医学の発展に大きく貢献した。それまでの日本医学は中国流の漢方を基盤としており、人体の構造に関する正確な知識が不足していた。実際に腑分け(解剖)に立ち会った玄白らはオランダの解剖書「ターヘル・アナトミア」と見比べ、その正確性の高さに驚愕し、翻訳を決意する。

解体新書の刊行により、西洋の科学的な解剖学が導入された。また、翻訳の過程で多くの医学用語(神経や動脈など)が生まれ、蘭学の発展にもつなげた。訳語が作られたことは、鎖国下の日本において西洋の文物を理解する下地となり、さまざまな学問において人材が育つ契機となった。さらに観察や実験を重視する科学的思考が日本に根付いた。

解体新書の存在は西洋医学の普及の礎を築いた点で、日本医学史において極めて重要な意義を持つ書物といえる。

日本近代医学の礎

解体新書の
意義とは？

日本で初めて刊行された
本格的な西洋医学の解剖書
解体新書

蘭学トリビア
なぜアダムとイブが!?

「解体新書」の扉絵は、平賀源内に西洋画を学んだ秋田藩士の小田野直武によって描かれた。モチーフはスペインの医師が著した「ワルエルダ解剖書」。なぜキリスト教が禁止されている時代にアダムとイブが描かれたのか。理由は未解明だが、源内が関係している説もあり。



解体新書を出版した
蘭学導入の立役者

杉田 玄白

(すぎた げんぱく)

1733(享保18)～1817(文化14)



小浜藩医の子として江戸で生まれ、幼少期を小浜で過ごす。前野良沢、中川淳庵とともに「解体新書」を刊行。医学のほか哲学や文学など広範な学問に精通し、後進の医師や学者を育成。親友は大発明家の平賀源内。

玄白とともに
解体新書を出版

中川 淳庵

(なかがわ じゅんなん)

1739(元文4)～1786(天明6)



小浜藩医で書家としても有名な中川仙安の子として生まれる。幼少期より薬草に接し、薬用植物を研究する本草家としても知られていた。平賀源内とともに火流布(石綿)を研究。父の死を機に小浜藩の奥医となる。玄白の後輩。